

特集 南米 / 参加型社会 / クレオール主義

インタビュー

藤掛洋子

[開発人類学 / IUI 教授]

参加型・対話型のヴィジョン、 フィールドワークからのまなざし

聞き手 藤原徹平

開発人類学者として長年にわたって南米・パラグアイを中心にフィールドワークを行っている藤掛洋子教授は、NGO「ミタイ（子ども）基金」代表として現地に学校を建設するなど、「現場」にいるからこそ見えてくる多くの問題と真摯に向き合いながら、教育や支援に積極的に取り組んできた研究者である。今回、そうした「理論」と「実践」の両面を兼ねそえる藤掛教授に、フィールドワークの重要性、そしてそこから見えてくる南米の現在についてお話を伺いつつ、対話を通じて築いていく新しい社会のヴィジョンについて語っていただいた。

INTERVIEW *with* YOKO FUJIKAKE



パラグアイ・カテウラのゴミ山 (Photo: Yoko Fujikake)



農村に続く赤土道 (Photo: Yoko Fujikake)

——藤掛先生のご専門である開発人類学は、たとえば文化人類学と比べると、どういった研究領域だと言えるのでしょうか？

文化人類学は、人間とは何かを追求する学問です。19世紀後半にヨーロッパ以外の周辺国を研究するために成立しました。イギリスでは社会人類学、アメリカでは文化人類学と言われています。文化人類学の特徴は、フィールドワーク、ミクロからマクロまで取り上げ分析する全体主義 (Wholism)、そして文化相対主義 (Cultural relativism) と言われています。文化相対主義は、文化人類学が開発の人類学 (anthropology of development)、開発人類学

(development anthropology) に展開した大きな鍵概念だと私は考えています。文化相対主義の議論のなかで出てきたもののひとつが脱開発・反開発です。もうひとつは、文化相対主義を普遍的な人権という概念に照らした時、対象地域の固有の「文化」や慣習 (法) を盾に「人権侵害」(例えば、女性性器切除など) が行われていたりします。対象地域の文化と普遍的な人権主義の折り合いをどのようにつけるべきなのか、論争はまだ続いています。そのような流れのなかで生まれてきたものが、開発の人類学、あるいは開発人類学というもの。前者は文化人類学的な視点から開発援助を分析するものでアカデミズムのな

かにとどまっているもの、後者は、開発援助に直接関与しながら開発について研究するものです。私の場合は、後者の立場を取り、開発の現場に身を置きながら、対象地域の方々が、何を求め、何に豊かさを感じているのか、文化人類学的な視点を忘れずに見えています。学校が必要なのか、橋などのインフラが必要なのか、彼ら・彼女らが求めているものは何なのかを参加型の手法を用い導き出しています。私たちが感じる豊かさとは異なることでもありますから、研究者と実践家の双方の視点を持ちながら、対象地域の文化やジェンダー、歴史的な認識といった、数字だけではわからないような価値規範に配慮しながら研究・実践活動を行っています。

——藤掛先生は南米のパラグアイを長年にわたって主なフィールドとしてきましたが、パラグアイが抱える問題の背景や歴史はどういったものなのか、教えていただけますか？

私が1993年に青年海外協力隊としてはじめてパラグアイという国に足を踏み入れた当時は、独裁政権が35年間続いたあとの、まさに民主化された (民主化への移行期が92年) 直後のタイミングでした。パラグアイは1811年に宗主国スペインから独立したのですが、首都アスンシオンには200年以上前の植民地時代の影響が色濃く残り、スペイン風の美しい建物やプラサ La Plazaと言われる四角い公園が街中にたくさんある一方、政治が大



Photo: 広報提供



ミタイ基金が建設支援をしたウブウテ工村の学校と子どもたち (Photo: Mitai Foundation)

大きく変わったことによって都市部・農村部で貧困や格差が進むなど、社会が不安定になっていました。もともとパラグアイは1970年代以降IMFの指導のもとで進められてきた単一作物栽培計画で、綿花を外貨獲得のための作物として栽培していました。しかし、90年代に入ると綿花の国際市場価格が暴落して、綿花をつくっても売れないどころか、赤字になってしまうということが起き、農民たちの貧困化が進んでいたんです。民主化されたことで、農民たちは資本主義経済に投げ込まれ自由競争にさらされたわけですが、世界経済に翻弄されて生活が不安定になっていきました。

——IMFによる単一作物栽培の推進は世界中で問題になりましたよね。自分たちが食べるもの以外の作物は資本主義経済を進めるために栽培していった、ということで、結果的に農民たちの生活が不安定になってしまった。

そうなんです。それに、パラグアイの貧困の要因のもうひとつに、シングルマザーの問題がありました。パラグアイは三国同盟戦争 [1864-70] で、男性が徴兵され、たくさん亡くなりました。当時の人口の男女比率が男性1に対して女性が5から10になってしまったんです。そうすると、子どもが増えないと国力が上がらないという背景から、カトリックの国でありながら男性が複数の女性と婚姻外の関係を持つことを社会が許容してきました。その結果シングルマザーが増えていき

ました。社会保障制度も不十分なため、子どもは自分の老後の面倒を見てくれる重要な「資源」ですからたくさん産むわけです。現在、男女比率は1:1くらいになっていますが、かつて築かれた社会規範やジェンダー規範がマチスモ (男性優位) 思想と相まって女性を劣位におくような社会構造が根強く残っています。パラグアイの都市から農村に行く途中、テラロッサといわれる「赤土道」があるんですが (参照:P.19写真)、それは独裁政権時代にわざと政府が道を舗装せずに残したものです。雨が降ると、土がぬかるんで農村から出ることができない。そうすると、農民たちは政治的な運動がやりづらくなる。農民を封じ込めるための独裁政権時代の戦略だったんですね。女性たちも農村から出るとsombreo (本来の意味は帽子であるが、愛人があるという意味の揶揄) がいるのだ、と非難されたりします。なので見栄えの良い四輪駆動車やオフロードバイクを持っている、ある程度裕福な地方都市在住の男性が、その道を通って農村の女性のところを訪ねたりすると、まるで白馬の王子が迎えに来たかのように女性たちが喜ぶということがいまでもあります。義務教育すら終えていない農村の女性たちも多いですから村から出るということは憧れだったりもします。

——そういったパラグアイで、藤掛先生はNGO「ミタイ (子ども) 基金」の代表として学校建設を手がけるな

ど、数多くの支援活動も行っています。研究と実践の両方に取り組んでいる。

シングルマザーの女性たちのように子育てと食べていくことに必死な方々、そして社会的に劣位に置かれている方々は、本来なら受けられるはずの社会保障や義務教育の制度、外国からの援助などをそもそも知らないことも多いんです。なので、そういう方たちを助け、支援するような、すなわちエンパワーするための教育支援や、交渉する力を養っていきけるような支援が必要なんです。パウロ・フレイレ [1921-97] というブラジルの教育学者が言っているような省察と実践や女性たちの実際の・戦略的ニーズの充足のための開発支援 (藤掛 2008) が重要だと考えます。フレイレは『被抑圧者の教育学』という彼の著書のなかで、教師が生徒に一方的に知識を詰め込ませる「銀行貯蓄型教育」を批判し、「問題提起型教育」の必要性を述べました。幅広い年代の生徒たちとの対話のなかで、問題を見つけ、その解決方法を考えていくという教育方法です。それと同時に、非抑圧者としての貧困層の農民と、それをつくりだす社会を牛耳っている支配層は、どちらも非人間的であって、それを対話によって変えていこうと考えていました。彼が言っていることで重要なのは、「意識化」という考えです。劣位に置かれている人は、社会構造が自分たちを劣位に置いているとは考えずに、自分が悪いと考えが



村の女性たちの所得創出活動 (Photo: Yoko Fujikake)

ちです。農村の女性たちも、自分たちは学校に行っていない、だから自分たちは貧乏なのだと考えていることが多い。でも、その貧困をつくりだしているのは、連続と歴史のなかでつくられてきた資本を搾取る仕組みであったり、女性や子どもたちを劣位におく社会規範 (マチスモ思想により構築されたジェンダー規範) だったりするわけです。それをどう意識化してもらうのか。また、女性や子どもたちのニーズ、あるいは利害関心は実は二段階に別れおり、それらにアプローチすることが重要 (藤掛 2008) だということです。社会という大きな壁を前にどう省察し、どうアクションを起こしていくのかを一緒に考えていか、その際にジェンダー配慮をいかに入れていくということが大事だと思っています (参照:P.21写真)。

——対話型の実践 (教育) を通じて「意識化」を促すという話に強く共感します。「意識化」を社会のさまざまな段階で実践できれば、市民同士の連帯感を生み出すことにもつながっていくように思えます。

現在の価値規範は「勝てる者が勝って何が悪い」という新自由主義的なものも多いと思いますが、フレイレの思想の流れを汲んでいる人たちのスタンスは、やはり連帯経済なんだと思います。貨幣を介在させなくとも、助け合い、生活していけるといった互恵的な関係によって豊かになっていく社会ですね。

その流れのなかに私も位置づけられると思います。私がこれまでに研究してきたことは、意識や行動変容といった質的なものも可視化するというものです。具体的には農村の女性たちのエンパワーメントを質的変化として評価し、可視化するという試みです。ある対話型の開発支援を通じて起こる、女性たちのエンパワーメントや意識化を量的なデータとして評価することはなかなかできません。これまでは就学率や識字率が上がったことなど量的なデータとして「測定」することが開発援助では主流だったんです。しかし、私は開発援助の現場に質的な変化を評価する、可視化することを試みました。このような評価は当事者にも意味があると思います。同時に開発援助の実践者や政府関係者、ドナーたちに向けて質的な側面の重要性を提言したかったからなんです。ある人たちからは、質的データを可視化するということは、あくまでも

主観的な試みだと批判されました。しかし現場にいて、実際に人々の意識や行動がどんどん変わっていく様子がわかるわけです。対話型の援助が行われていくなかで、妻が夫に発言ができるようになったり、子どもたちの意識や行動が大きく変わったりなどです。適切な支援が入れば、当該地域の方々には自分たちの意識や行動を知らず知らずのうちに省察して新たな立ち位置 (ポジション) を意識・半意識・無意識のうちにつくりあげていくことができるわけです。彼女たち・彼らたちの潜在能力を活かしたり、伸ばしたりできるような「適切」な支援をしていけば、対象地域の人々の意識はこんなにも変わっていくものなのに、なぜ援助実施機関はそれを見ていないのか、というのが95年に日本に帰国したときの問いでした。人々の意識の変化は半年や1年で出ることもあります。また、二層に分かれたニーズのもうひとつである戦略的ニーズの

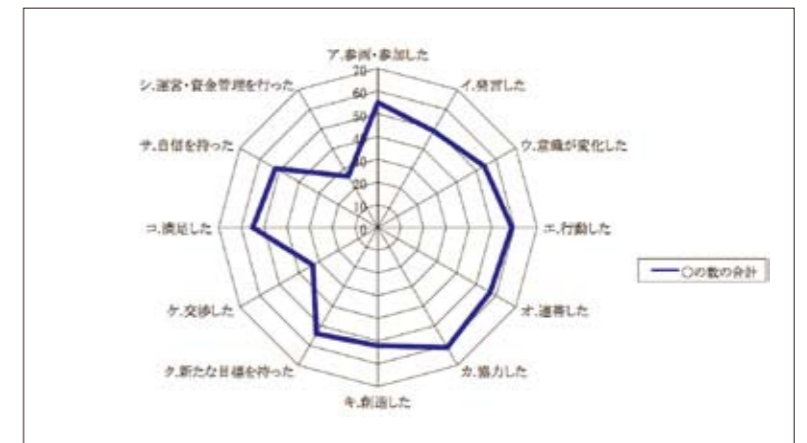


図: S村の女性たちのグループとしてエンパワーメント指標 (円グラフ) © 2000 Yoko Fujikake

発現には時間がかかるものもあります。しかし、これらは絶えず社会との接点のなかで変化していますし、人々が元気になっていく姿をみると、こちらも元気をいただきます。でも……それらは数字にはならないから「客観性を担保できない」と言われる。だからこそエンパワーメントの指標となるモデルをつくったんです(参照:P21図)。当初は多くの批判を受けましたが、結果的に、このモデルは多くの方々に受け入れていただき、評価していただきました。JICAではホンジュラスの農村女性の起業支援で活用されましたし、ラオスの車椅子活動を展開するNGOの評価でも使っていただきました。また、資生堂がバングラディッシュで展開する農村女性のエンパワーメントのためのBOP(Base of the Pyramid)事業でも評価に使われることになりました。

——フィールドワークや対話型のワークショップという行為に質的な評価を与えるこの図は本当に素晴らしいですね。いままでどこか啓蒙、理論の押しつけのだった都市や建築の設計の場でも、市民との対話ワークショップが実践されつつあるのですが、質的な指標がないので、どこかポリティカル・コレクティブのためだけにやっていた。住んでいる人たちとの対話をきちんと質的に評価していくことで次の時代の建築が生まれてくる気がします。

そうですね。私がフィールドワークをするのは、理論を再構築するためです。現場にしか答えはないと思っているものですから(笑)。社会は日々変わっていて、昨日そうであったものが今日も真であるとは限らない、そんな時代ですから。そのぐらい人間はものすごくクリエイティブな生き物で、そこにはつねに新しい状況が生まれている。社会科学の調査研究・理論の検証の結果つくられたのが理論だとすれば、フィールドワークをして、新しい理論につくりかえていかなければ

ならないと思っています。もちろん、同時に普遍的なものもあると思います。それも追求したいですね。たとえば、劣位の状況にあった女性や子どもたちがどのような条件下にあるとエンパワーするのか、人はどういう状況で元気になるのか、まさに人を研究する文化人類学を礎にした開発の人類学、開発人類学、ジェンダーと開発の役目だと思っています。

——いままである理論を強化するためにフィールドワークをするのではなく、理論をつくり変えていくためにフィールドワークをするということですね。

そうですね。生意気かもしれませんが、既存の理論をなぞるために現場に行くわけではないと思っています。文化人類学的な調査とは、調査協力者の方にインタビューをさせていただいて、その発言の内容について三角検証なども行い、何が「真実」か(恐らく複数の「真実」があるでしょう)、複層する社会を丁寧に浮き彫りにする作業になります。とても手間と時間のかかる方法なので、文化人類学者ならやるけれど、開発コンサルタントだったらやらない/やれない(時間の関係などで)ことでしょう。もちろん、各国で活躍されるコンサルタントの方のお仕事も重要ですので、私が開発したエンパワーメント評価の指標も、パラグアイ以外の国で活用でき、かつコンサルタントの方でも調査ができるように、場合によっては12ある指標を11にしたり、その地域に特化した項目をつくるなど一緒に工夫しています。このような作業は文化人類学者というよりはコンサルタントに近いかもしれませんが(笑)。ただ、私のなかでは、人はどのような状況でもエンパワーメントできるというものを普遍的に追求したいと思っておりますので喜んで、自分のつくった指標をローカルなものへとアダプトするお手伝いをさせていただきたいと考えております。

先ほどのコンサルタントの方の話

を少し補足しますと、ODA事業に関わることになっても、いくつかの案件を同時で動かしていたりするので、フィールドに2時間ぐらい行っただけで、その情報を基に開発の青写真をつくらなければならないということも実際にはあると思います。それは地域研究者からすると「けしからん」ということになると思いますが、一方で彼ら・彼女らがつくった青写真から見えてくるものも多々あると思います。ですから立場の違う人々と対話を通じて新たなものを生み出していく努力をしないといけない。活性剤があればつながるはずですから。

話が少しそれてしましますが、いま観光地開発として「スラム観光」という取り組みを開発人類学の方が研究しているのですが、やはり議論が分かれています。先進国から来る人々が上から目線でスラムの人々を見るという問題と、一方ではそこに人々が訪れないと違う立場の人々との対話が生まれません。それは、支援というものが昔から孕んでいる命題に酷似していると思います。なので、私自身、多面的・複眼的に現実を見るための工夫や努力をつねにしています。

——たしかに、各地域・各文化における人々の独自の営みを、お互いの世界を見て驚くということが人間の知的好奇心のベースにあるとすれば、スラムを見て驚くとか、あるいはパリや東京を見て驚くといったことは、「対話」を生むきっかけとして必要だと思います。一方で、ツーリズムというと、非常に自由主義経済的な発想でもあるので、複雑ですね。

答えを簡単に出せる問題ではない、だからこそ、考え続けていかなければならないんだと思います。資本主義的なポジションからの眼差しもあれば、それとは違う連帯経済的なポジションからの眼差しもある。「I Position(アイ・ポジション)」という考え方があります。そのポジションを理解する必要があると思います。もち



2013年12月、本学で公演するカテウラのオーケストラ (Photo: Nozomu Morita)

ろん、現在のような資本主義経済の枠組みは、議論の余地があると思います。連帯経済というのは、考え方としては真逆になりますが、残された21世紀、そして未来に向けて、新しい経済システムの流れが生まれて然るべきだと思いますし、その新しい流れは実は水面下で大きなうねりのごとく起こっているように思います。パラグアイにはカテウラという場所に国中のゴミが流れてくるスラムがあるのですが(参照:P.18写真)、そのゴミから楽器をつくった子どもたちがファビオ(Favio Hernán Chávez Morán)氏の指導のもとオーケストラを結成しましたが、いまや世界中で注目されているカテウラのオーケストラ(Orchestra of Recycled Instrument of Cateura, Paraguay)です。昨年2013年12月に駐日パラグアイ大使館や株式会社良品計画からの後援を受けてこの楽団を招きました(参照:P.23写真)。学生たちはカテウラの若者たちとの交流を通していろいろなことを学んだと思います。大学はこうした対話を生み出していく「場」であると同時に、答えの出ないことについて考えていく空間でもあると思っています。

——レム・コールハースという現代を

代表する建築家が、「これからの建築家はより文化人類学的なアプローチになるだろう」という言葉を口にしていました。グローバルとローカルのあいだを横断し続けて、つねに固定観念を持たない必要があると。藤掛さんが仰る「I Position」のように、どの専門領域でも自分を複数化するというような考え方が必要なのかもしれません。

私は、いまは開発人類学者として話しているけれども、家に帰ったら、子どもの母親にもなるわけです。なので、私自身のなかには《I》(=私)というものがいくつもあって、子どもの前では母親というIが前景化することになる。それは人々が普通にやっていることでもあります。アメリカに労働力として移住したチカーノ(メキシコ系アメリカ人)の研究でも、アメリカとメキシコのふたつの国を無意識のうちに越境させている彼ら・彼女らのアイデンティティを「複数のアイデンティティ」や「ボーダーランド」という概念で呼んでいます。社会のなかにあるいくつものボーダーを複数の自己が往還している。もちろん、最後は「自分はどこにポジショニングするのか」、ということを決めないといけないとも

思います。私自身、ユートピアと言われるかもしれないけれど、やはり人を踏みつけて強者が君臨するような社会ではない、格差の少ない社会やジェンダーによる差別のない社会の創造に貢献したいと思っています。その時の鍵概念は連帯経済やジェンダー、社会開発、人々のエンパワーメントなどになるのだと思います。このような立場を自分自身のホームランドとしながら、構造的な暴力や格差で苦しむ人のいない社会をつくりたいと思って研究をしています。もしかしたらそこが自分自身のホームランドとして揺るぎないからこそ、こういった研究やNGOでの活動に取り組み続けていけるのかもしれません。いまパラグアイや世界では、NGOが街づくりを手がけるという動きも出てきています。

都市イノベーション研究院の建築・芸術・土木工学・国際社会といった複数の領域の研究者とNGOなどがつながり、新しい息吹のあるものを創造していきたいですね。これからも楽しみます。今日は本当にありがとうございました。■

Yoko FUJIKAKE

お茶の水女子大学大学院博士後期課程修了(博士 学術)。国際協力事業団(現機構)青年海外協力隊、技術協力専門家、国際協力総合研究所(現JICA研究所)客員研究員、東京家政学院大学大学院助教授・准教授を経て、横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授。専門は文化人類学、開発人類学、パラグアイ地域研究、ジェンダーと開発。主な著書に、『開発援助と人類学——冷戦・蜜月・パートナーシップ——』(共編著、明石書店、2011)、International Handbook of Gender and Poverty: Concepts, Research, Policy(共著、Edward Elgar、2010)など。NGO「ミタイ(子ども)基金」代表として、農村女性のエンパワーメントや学校建設などの活動に取り組んでいる。